

発刊のあいさつ

浦添市教育委員会教育長 保久村 昌 伸

浦添市教育委員会は、一九八七年度（昭和六十二年度）に『琉球王国評定所文書』第一巻を刊行し、昨年度までに既に七巻を刊行しております。これまで琉球王国の近世史にとつて重要な文書であるという高い評価を得ながらも、同文書は断片的にしか翻刻出版されませんでした。当教育委員会では、現在確認されている全史料を『琉球王国評定所文書』全十八巻として刊行する予定です。

浦添市は、歴史的には「うらおそい」の言葉にも示されるように、沖繩本島の政治の拠点として栄え、特に大交易時代と称される時期には中国等とも貿易を行っていました。このような「国際性ゆたかな文化都市」をめざす文化事業の一環として「琉球王国評定所文書」刊行事業を推進しております。

本事業が琉球・沖繩歴史の研究の発展にいささかなりとも貢献することになれば、これに過ぎる喜びはありません。本事業の遂行にあたっては、新たな史料発掘作業を始めとして幾多の困難が予想されますが、各位の従前にまさるご理解とご協力によって、その完遂を期したいと決意しています。

『琉球王国評定所文書』第九巻には、内務省作成の『旧琉球藩評定所書類目録』の通し番号の一五一四号・一五一八号・一五一九号・一五二一号・一五二六号の五つの文書を収録しました。年代は一八五四年（咸豊四）から一八五五年（咸豊五）までの二年間と僅かの間になりますが、一八五四年には、沖繩にはペリー艦隊来航だけでなく、口

シアの艦隊が日本との交渉のためやってきています。そして彼らは琉球にも立ち寄っていたのです。プチャーチンという提督の率いる艦隊の琉球での様子は、ゴンチャロフの『日本渡航記』の中に描かれています。本巻には、それと比較することができるといふ一五二八号という文書が入っています。

また一五二二号は前巻所収の一五二二号に続いて、国立公文書館所蔵の文書になります。一年と四ヶ月ほどの史料ですが、その分量が第九巻の半分強に及ぶ量であることからわかるように、そこには琉薩・琉中の関係を具体的に表す内容が含まれており、内容もたいへん幅広いものとなっています。同様に一五二六号も「年中各月日記」の全貌のわかる史料です。これら史料集が多くの方の市民をはじめ、研究者の間で活用されることを願っております。

最後に、本事業のために貴重な資料を提供し、また、刊行について御快諾下さいました東京大学法学部法制史資料室並びに国立公文書館の関係各位、また、史料の筆耕解説にご協力下さいました研究者各位に深く感謝申し上げます、発刊の言葉と致します。

一九九三年（平成五）三月吉日